

萩原葉子
尋麻の家



尋^い
麻^ら
の
家^く
^さ

萩原
葉子



蓐い麻くの家

昭和五一年九月一五日発行
昭和五四年五月二〇日三〇刷

定価七六〇円

著者 萩原葉子はぎわら ありこ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式會社新潮社

東京都新宿区矢来町七一 電話 業
務部 (〇三)二六六一五一 編
集部 (〇三)二六六一五四 一郵便
番号 一六二 振替 東京四八〇八

印刷所 二光印刷株式會社
製本所 大口製本株式會社

© Yoko Hagiwara 1976 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信保宛御送
付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

尋^い

麻^き

の

家

第一章

1

梅雨のような細かい雨が、その日は降っていた。青い竹が鬱蒼と生えた竹藪の中に、傘をさした三人が立っていたのを覚えている。

青い竹はどんよりした空に向って背高く延び、その根本には生れたばかりの竹の子が、黒い土を持ちあげて芽を出していた。祖母の勝と父の洋之介は、この竹藪の持主の話を聞いていた。背の低い優しそうな男である。

この辺りは閑静な屋敷町で、S区では成城町に次ぐ高級住宅地であると、男は説明した。新宿から小田原までの小田急線も三年前に開通したばかりでまだ発展の見込みがあり決して悪い所ではない、と言った。私は、竹の子を見ていた眼を今度は外に向けると、すぐ眼の前に高圧線の高い鉄塔が見えた。竹藪の地所は角地になっていて、北西の方は少し隔った家並につづく平地であるが、東側は高圧線の塔が聳え、その裏が公園のような空地になって、ブ

ランコが一台雨に濡れていた。南側の斜面は坂道が川までつづき雨のため水量が増しているのか、川音が賑わい、誰かが喋っているような気がした。

「高圧線があるので、東側には家が建ちません」と地主が言い、その理由が最後の決め手になったように洋之介は、この土地に家を建てる決心がついた、と言った。勝は、洋之介の袖を引っぱった。鉄色の紬つとの和服に、同じ鉄色の羽織はおりを着ていた瘦身の洋之介は、引っぱられた拍子によるけ、危うく転ぶところだった。地主の前で容易に腹の中を見せてはならない合図なのだった。祖母の勝は、何事もかけ引きが大事だと、世事にうとい洋之介に来る道々言い含めてあったのだ。

「こんな竹藪じゃ、タヌキかキツネでも出そうじゃありませんか」ふとって大柄の勝は言った。

「お氣にめしませんでしょうか？」小柄の地主は遠慮がちに言った。

「娘が、何と言いますか」

勝は一緒に来なかった麗子叔母のことを持ち出し、かけ引きの種にした。私は父の意見を重くみない祖母が不服だった。あとでハガキを出しますよと、相手をじらす口調で質朴そうな地主に帰ってもらうと、入れ違いに向うから息せき切って三分刈りの坊主頭の男が来た。洋之介の弟の与四郎だった。カーキ色の木綿の服に何故かいつもリュック・サックを背負って、忙しそうにしている叔父だ。手に地図を持った与四郎は、「お母さん、良い土地が見つ

かりましたか」と、息を弾ませて言った。

竹藪の土地を開き新しい家が建ったのは、翌年の夏のことであった。地主の希望を退け、土地を買わずに借りることにしたのは、満洲事変が勃発した社会情勢から、時代の雲行を案ずることと、借地代を払った方が得だと計算をした勝と与四郎の考えからであった。

洋之介の設計の家は、東ヨーロッパ風の新鮮な感覚であった。南側から見ると中世の城と寺院とを取りませたような急勾配の屋根が高く見え、遠くの方からもすぐそれと分った。京都の紅殻塗りの濃茶を家全体の色彩にし、洋風と和風を取りませた独特な様式の家だった。

建築にあたり熱心に家相を学んだ洋之介は、どこから見ても落ち度のない家を設計したことに、満足していた。最も念入りに考えた私の部屋は、この家の異^{ちがひ}の方角に当り、そこに長女が住むと家が栄えるということであった。

設計図の青写真を見た勝は、「朝日の入る東南の角の一番良い部屋なのに『居候たち』に占領されるのは困る」と反対した。居候というのは、私と妹のことであった。一家の実権を握っている勝が折れたのは、異の方角に隠居などの年長者が住めば凶事が起るという家相学を説明されて、渋々ながら納得したのであった。家相には細心の注意を重ねた洋之介が、この家の鬼門に当る丑寅の方角にわざと廁を配置し、一つだけ凶の部分を設定したのは、あまりに家相が良すぎると逆目に凶が出るという説を信じたためである。丑寅の方角の廁が凶というのは、その家の長子が二十歳になった時、「祖先の家名を汚し、危難災害を發し変死する」

恐ろしい事が起るといふのだが、良すぎる家相を押さえるための裏の配慮で、わざと設計したのだと言った。

家族は支配権を握る祖母の勝を中心に、洋之介と出戻りの叔母麗子がいた。毎日の暮しは勝と麗子で取り計らわれ、おまけの存在で私と妹がいた。来年は小学校を卒業する私と、小学校に籍はあってもまだ名前も書けない妹の朋子である。

私が八歳の時に父母が別れ、私と妹は父の故郷G県の祖父母の許に引取られて育った。父親と一緒に暮したのはわずかの月日で、間もなく子供を預けたまま洋之介は仕事のために上京したのだった。一人で野木山倶楽部というアパートに暮していたのだが、私達二人の子供は父がいない不安で泣きわめき、勝を手こずらせた。母親から離され、また父親も別居している寂しさに、夜っぴて泣き通したのであった。勝にしてみればとんだ厄介者を背負わせられた恰好で、その腹いせはすべて私達に当り、それがまた泣きわめく原因となるという、手のつけられない状態だった。祖父が亡くなったあと、勝が思い切った発想で東京に家を建てる事を提案したのは、洋之介の仕事のためというよりも、荷厄介な子供達を洋之介の手に渡してしまいたい一念からであった。それに、東京に出れば芝居見物やデパートめぐりも思う存分に出来る。唯一の生甲斐とばかりに溺愛している末娘の麗子と何不自由なく暮せるだけものを、勝は夫の遺産を満鉄の株に変えるなどして用意してあったのだ。

「この家のものは、縁の下のチリ一つでも皆このアタシのものだよ」と、勝は一番先に私に

言った。

私は縁側の下にもぐり、カンナ屑や木の片々を大事に拾い、本気で祖母に持ってゆくほど、まだ無邪気な子供だった。いつも大柄な勝の傍にいないと寂しく、ダニと嫌がられても夜眠るまで離れられなかった。私は子供部屋の窓から植えたばかりの背の高いポプラの木や梅の苗木を眺めていることがあった。この家の大事な位置にある異の方角は私の部屋の東側の窓に当り、高圧線の高い鉄塔が真向いに見えている。鉄塔の裏側にある公園のブランコは私の恰好の遊び場であった。学校から帰り、すぐ木戸から抜け出してブランコに乗っていると、川遊びで泥だらけになった朋子が泣きながら駆けて来たり、昨夜帰らなかった洋之介があぶない足取りで帰って来たりするのだった。新しい家は良いことと、嫌なことが混り合いながら、少しずつ私に馴染んでいった。

2

「菊五郎の羽根の禿はもう何年ぶりだろう」

勝は、荷物が片附くと早速、与四郎に電報を打ち、歌舞伎の栈敷席を買いに走らせた。まだ電話がなかったので電報局まで女中のヤエを走らせていた。同じG県にいた与四郎は、兄の新築の家が出来上る頃、家族をおいて一人で近くの下宿に移って来た。やがては家族を呼びよせ、頃合な借家住まいをするつもりなのだ。洋之介のあとを追って来たのは、秘かに考

えている計画を少しずつ実行するためだったのだ。

癖直しの布を銅の小鉢に汲んだ湯の中に入れ、勝の背後で櫛を入れていた麗子は白い指先で熱そうに絞る、

「今度新築祝に姉さん達が来る時に、何を着ようかしら？」と言った。五人の姉妹の中でも、末娘の麗子は最も美人であった。G県にいる時も小町娘と評判が高く、三度も出戻りした娘には見えない若々しさであった。新しい家に来て早速近所に評判が伝わり、姿を見かけると私鉄の駅員まで、口笛で合図をした。或る実業家に嫁に行ったのを最後に実家に帰っていたが、美しい容姿のために若く見えても、三十歳を越す、当時としては中年だった。

麗子の趣味は勝と同様に着ることと、歌舞伎やデパートめぐりをする事だった。三歳から習わされた琴、三味線の芸事も上達し、免状も幾つか持っていたが、本人は見栄と、つき合い程度の気持でしかなかった。

麗子は簞笥の中にまだ手を通していない反物を幾反も藏っておくが、それを縫わせて着るよりも必要の度に別に新しい着物を買ひ、自分の財産として持っていたと考えていた。

癖直しを絞る手にも力が入り、麗子は母親の禿の真ん中に、クワイの取っ手のような黒いものを貼りつけた。勝は極端な怪齋であるが反面では衣装道楽で、麗子と自分の着物を拵えることには、出費を惜しまない執念を持っていた。二人は簞笥のコヤシと言われるほど袖を通さない反物を藏っておいても、なお新しい反物を買っては、簞笥の引出しの奥へ藏い込む。

「せっかく東京へ来たんだから、錦紗やお召ばかりじゃつまらない。日本橋の高島屋へ明日にでも行って、上等の大島を疋ひきで見つくらわせよう」

カッパのような禿かぶにクワイの取っ手が貼はられると、元結で固く根を締め、両鬢びんの張り出した日本髪が結い上る。仕上げに鼈甲べつこうの簪かんざしをタボの右寄りに刺すと、出来上った。白髪を黒く染めた細い質の髪であったが、軽く鬢付油をつけるためか、一日中毛筋一本も乱れはしなかった。毛染めの時は決まって「居候のお前達を世話してから急に白くなった」と、私達のことを恨んでみせるのだ。

勝の髪結いが終ると、麗子は帯をゆるめて衿元を後ろへ引き、肌脱ぎになった。白い水白粉をボタン刷毛にたっぷりつけて、首から胸まで真白に塗りこめた。肌理きりの細かい肌きに吸われるように白粉が吸収されてゆくと、もう一度ボタン刷毛で白粉を塗り直す。後ろの衿足は背後に廻った勝が別の刷毛で、丁寧に塗ってゆき、二人一体となって仕上げると日本人形の首のような白塗りの美人が生れる。

合わせ鏡で映した自分の衿足に満足したように麗子は、「今日はよく白粉がのったわ」と、にっこり笑う。京紅を小指の先につけ、唇の内側を小さくつまめたおちよほ口に、ほんのり紅をひくと今度は京都の舞妓のようになった。神様は姉さんのような美人をなぜ造ったのかしら、と与四郎は言うことがあった。私もそう思った。笑うと形の良い唇と白い歯が魅力的であった。二人が化粧に夢中の間、女中のヤエは台所で忙しく歌舞伎の弁当を煮ていた。幕

の内弁当の作り方を新しい家に来たばかりのヤエに教えるが、勝の思うようにはゆかなかつた。

「近頃の女中は幕の内弁当の煮方一つ知らないんだからあきれる」と、不機嫌だった。劇場の弁当を食べるのは不経済だからと、八百屋で選んで買った材料で朝から時間をかけて煮る。料理は私には覚えなくてよいと、台所に入ると叱り、弁当の内容も私には秘密であつた。

ヤエは井戸水をポンプで汲みあげ念入りに野菜を洗う。水は夏でも冷たく、指先の感覚がなくなってしまうのか、ヤエはよく食器を落して割った。勝は、大事にしているものばかり割り、割れてもよいと思うものは、ちっとも割らないと、廊下に顔を押し当て泣いて詫びるヤエを叱った。

「いくら教えても、ノレンに腕押しだからネ」と、美味しそうな匂いを家中にこもらせ、あと少しで煮上るところで火の加減に失敗したヤエを厳しく叱責した。少し固めに煮えた栗が気に入らなかつたのである。

「与四郎もまだ来ないし、誰も彼も気の利かない人間ばかりでいやになるわ」

と麗子が言った時、与四郎がいつものカーキ色の洋服にリュックを背負つて来た。棧敷の席がうまく取れたことは、電報で知らせが来ていたのである。三分刈りの坊主頭をべこべこと下げながら棧敷の入場券を渡し、遅くなった詫びにリュックの中からバナナの房を取り出した。朝、築地の市まで行って安いのを仕入れて来た、と言いかけると、「しつ」と、麗子

は声を制して辺りを窺った。私と朋子に見つからないためであった。

「氣が利いてるのネ」

麗子はおだてるように弟に言った。遅いと文句を言われたのが、急に賞められると、ついでに与四郎は台所へ入ってヤエの手伝いを始めた。男ながらに料理が上手で、女房の作ったものより自分の味の方が良いと、料理と買物の役まで与四郎は受け持っていたのである。

「女房の尻に敷かれてだらしない男だ」

と勝は嘲笑しながらも、こんな時は唯一の頼りとばかりに、「たのむよ」と言った。引越しの時も家具を動かす時も、与四郎がいなくては男手^{おとで}が他にはないのであった。洋之介がたまに手伝うと、棚から物が落ちて来たり、毀したり、かえって二重手間になるので、「手伝わないでおくれ」と、勝はことわった。不器用な洋之介と、器用な与四郎を比べて、同じ勝の息子なのにと私は不思議でならなかった。

中廊下を隔てた北側の部屋の納戸は二人の着物の着替え場所であった。衣紋掛けに大きく拡げて柄を見たり、大型の姿見に映して眺めるのである。疊^{たた}んであった畳紙を拡げて、二人は「お召し替え」を始めていた。若造りの好きな麗子は総絞りに金糸の刺繡の入った別誂^{べっせん}えの中振袖に、丸帯を生娘のように胸高々と締める。勝は金糸の手縫い刺繡の帯を、力一杯に麗子の背中に結びあげる。与四郎がどんなに力があっても、手伝わせなかった。はあ、はあ^あと荒い呼吸をしながら、光沢のある丸帯をふくら雀に背中一杯に結び上げるのであった。

菊の刺繡の細かく手の込んだ半衿を多目に出した胸元に、本絹の総絞りの贅沢な帯上げを、これも多目に帯にかけ、絵羽を着た母親に連れ添われて歩くと、華族のお姫様のような私と思うのだった。

「棧敷に坐るのだから着崩れないようにおしよ」と、勝は着つけには特に念を入れた。

与四郎が手伝ってやっと手際よく出来上った幕の内弁当を、勝は蓋を開けてしらべた。好物のクワイ、栗のキントン、紅鮭、ナルト巻、牛肉等々が美事に並べられている。鍋の残りは明日の朝のたのしみに残しておくのである。ヤエにも私にも見せないで戸棚に藏い込むのだった。勝は、弁当の中味に満足すると、総カノコ絞りの大きめの袱紗に大事そうに包み、待たせておいたハイヤーの中から、最敬礼するヤエと与四郎に「留守を頼むよ」と、念を押した。

脱ぎ捨てられた普段着を畳みながらヤエは、無事に送り出した安堵の吐息をついていた。与四郎のおかげで、弁当の失敗は叱られないですんだものの、二人のお見送りは大変だといつものように思うからである。あわてたので危うく皿一枚割りそうになり、給料から差引かれるところだった、とヤエは胸をなでおろすのだった。

3

洋之介は、引越しの前後にたまった仕事を、夕方から飲みに出る習慣も止めて打ち込ん

でいた。長年かかって書いた作品をまとめて出版する目安がついた時は、年を越して春になっていたのである。仕事の筆が早く、短時間に何枚もの原稿をこなすのであるが、同人雑誌や未知の人に頼まれた原稿もひき受けてしまうのでかえって忙しく、仕事はいつも終らなかつた。

しかし、洋之介の仕事には無関心の勝と麗子は、新築祝に着る衣装のことでデパートへ通い、染物屋を何度も呼び、大声を交わし、家の中はごたごたと騒々しかった。

新築祝に集ったのは、七人の兄弟姉妹の全員であつた。早春の桜の花が満開の頃で、軍人の軍吉を除けばあとは全部血を分けた兄妹である。軍吉は長女正子の夫である。久々に会つた姉妹達は、季節も良い時に姉妹が全員集れたことを喜び合つた。子供達の甲高い笑声もあがり、家の中は桜の花が咲いたような時ならぬ賑わいを呈した。親族の中に加えて、ただ一人外部の客として招かれた洋之介の友人の早乙女一郎が遅れて来た。早乙女は満開の花のような雰囲気の中に早速とけ込み、持ち前の声量のある大声で冗談や洒落を言い、座を盛り上げるのに巧みであつた。

麗子の弾く三味線の撥の音が、歯切れよく鳴ると拍手が起り、「三番叟」が鳴り出した。私は三味線が好きであつた。G県にいた頃、麗子に三味線を習わせてもらいたいとねだつたが、「稽古ごとくと言うものは、両親揃っている子供だけのものだよ」と、勝に言われ、それから音色を聞いただけでも、気持が萎縮してしまうようになった。

客に挨拶だけをして、あとは引っ込んでいるようにと注意されていたが、まだ私は誰の前にも顔を出していなかった。家に泊まり客が来るのは嫌いで拗ねていたのだが、その上挨拶が不得手なので、見つからないように隠れていたのである。南の縁側の、雨戸の戸袋の裏が恰好の場所だった。部屋からは見えないので、勝と麗子の二人がひっそりと何か相談している時私がそこにしゃがんでいても、気がつかれなかった。

普段ほとんど締め切つてある離れ座敷は、明るい電球に点け替えられ、玉堂の掛軸が床の間に掛けられていた。この離れ座敷は、勝が、「アタシ専用の部屋だから洋之介の客には使わせない」と言い、麗子の他は誰も入るのを禁止されていた。大事な玉堂の掛軸の掛けられる時は、勝の上機嫌な証拠であった。今日は解禁の、時ならぬ賑わいに満ちた部屋から、麗子の弾く三味線の音に混じつて、早乙女と洋之介の話し声も聞えてくる。洋之介の友人であれば誰でも毛嫌ひする勝も、早乙女だけは特別で、親類の仲間に混じえることを許していた。

それは早乙女が如才なく勝の好みに合わせた手土産を持つて来ることと、詩ばかりでなく時には大衆向きの売れる小説を書き、生活が豊かであることもあった。勝は、「洋之介も早乙女さんの真似をして売れる小説が書けないものかね」と、感心する。しかし、早乙女の来訪の目的は、もう一つ別にあった。

「今日はいよいよお祝いだから、わたしも一つ珍芸を皆さんに披露して、座興にしましょうか」